

福祉権力リミタリアニズムと双極性認知歪曲モデルに関する批判的検証

エグゼクティブ・サマリー

本レポートは、研究者・山内裕治氏が提唱する「Service of Empowerment (SoE)」理論フレームワークに対する厳格かつ包括的な検証結果である。本分析では、イングリッド・ロレイNZ (Ingrid Robeyns) の「リミタリアニズム（制限主義）」を経済領域から福祉領域へと転用する際の整合性を中心に、現代政治哲学の広範な文脈の中で本フレームワークを位置づけた。具体的には、「双極性認知歪曲モデル」の論理的整合性の評価、「福祉権力 (Welfare Power)」の定量化手法に対する既存の心理測定および社会学的基準に照らしたストレステスト、さらにリバタリアニズム、リベラル・エガリタリアニズム、コミュニタリアニズム、批判理論の各観点からの批判的検討を行った。

SoEの中心命題である「専門職による意思決定権限（福祉権力）の独占が、強者における『ヒュブリス（傲慢）』と弱者における『アノミー（無力感）』という対称的な病理を生み出す」という主張は、理論的に堅牢であり、経験的にも説得力があると判断される。ロレイNZの「リミタリアニズムの天井（上限）」を関係性における権力へ適用することは、「善意のパターナリズム」に関する既存文献の重大な欠落を埋めるものである。しかし、実装メカニズムとして提案されている「福祉権力バランスシート」や「憲法的AI (Constitutional AI)」による監査は、「指標への執着 (Metric Fixation)」や「監視人道主義」のリスクを伴うため、国際的な普及に先立ち、これらのリスクを軽減する策が不可欠である。

本書は、フェア・リミッツ・プロジェクト (Fair Limits Project) や広範な学術コミュニティへの接触に先立ち、SoEの理論構造を強化するための「事前査読」として機能することを目的としている。

1. 先行研究のサマリー：理論的布置の特定

SoEフレームワークは真空の中で生まれたものではない。それは政治哲学、社会心理学、批判的ソーシャルワークの交差点に位置している。本セクションでは、SoEの中核的主張の根拠となる「直接的な先例」と、そのメカニズムを支える「隣接領域の文献」をマッピングする。

1.1 リミタリアニズムとフェア・リミッツ・プロジェクト

SoEの主要な理論的アンカーは、イングリッド・ロレイNZの「リミタリアニズム」である。欧州研究会議 (ERC) の助成を受けた「フェア・リミッツ・プロジェクト」は、「一定量以上の資源を持つことは許されるか？」という問いを体系的に探究してきた¹。ロレイNZは、極端な富が道徳的に問題である理由として、**民主主義的論拠**（過剰な富は政治的影響力に変換され、政治的平等を損なう）³と、**緊急の未充足ニーズの論拠**（余剰資源は気候変動や貧困などの

危機に対処するために再分配されるべき)⁴の2点を挙げている。

SoEの革新性は、ロレインズの研究における「空白」を特定した点にある。フェア・リミッツ・プロジェクトは生態学的資源や「ドーナツ経済学」へと対象を広げているが¹、「意思決定権限」や「管轄権の権力」といった**非経済的な関係性資源**に対して、リミタリアニズムの論理を明示的に適用してはいない。SoEは、富に「富裕線 (riches line)」があるように、ケアの権力にも「パターナリズム線」が存在し、それを超えるとクライアントの自律性に害を及ぼすと提唱する。この転用は論理的に妥当である。もし「自律性」が(ロールズのいう)基本財や(センのいう)中心的ケイパビリティであるならば⁷、専門家階級によるその自律性の支配・独占は、分配的正義の侵害を構成するからである。

1.2 双極性モデルの系譜

SoEは、極端な権力格差が上極に「ヒュブリス(傲慢)」を、下極に「アノミー(無力感/無規範)」を生み出すという「双極性認知歪曲モデル」を提示している。この対称性は、異なる二つの文献群の収束点に基づいている。

1.2.1 上極：ヒュブリス症候群と権力の中毒性

SoEが記述する「ヒュブリス要因」は、デビッド・オーウェン卿とジョナサン・デビッドソンによる****ヒュブリス症候群(HS)****の研究によって直接的に支持される⁸。オーウェンはHSを、権力の保持、特に十分な制約なしに長期間権力を持つリーダーによって引き起こされる「後天的な人格障害」と定義している。症状には、現実との接触の喪失、助言の軽視、地上の監査者ではなく「歴史や神」に対してのみ責任を負うというメシア的信念が含まれる⁹。

オーウェンはブッシュやブレアといった政治指導者に焦点を当てたが⁸、SoEがこの診断を「福祉官僚」に適用したことは重要な拡張である。この心理メカニズムは、ダッカー・ケルトナーの****権力の接近/抑制理論(Approach/Inhibition Theory of Power)****によっても裏付けられている。高権力者は脱抑制的な行動、共感の低下、他者を目的のための手段とみなす傾向(対象化)を示すことが実証されている¹²。ケアの文脈において、これは「善意のヒュブリス」として現れる。すなわち、専門家はクライアント自身よりもクライアントのニーズをよく知っているという確信に基づき、「最善の利益」という名目で同意を体系的に無効化するのである。

1.2.2 下極：アノミーと学習性無力感

「アノミー要因」は、エミール・デュルケームとロバート・マートンの社会学的伝統に依拠している。アノミーは無規範状態、疎外、社会的崩壊を指す¹⁴。SoEのフレームワークにおいて、これは単に経済的貧困の結果としてではなく、**行為主体性(エージェンシー)の剥奪**の具体的帰結として再解釈される。

施設ケアや制限的な福祉レジームにおいて頻繁に見られるように、個人から意味のある意思決定を行う力が剥奪されると、抑制、同調、撤退を特徴とする「無力感の心理」が生じる¹²。これは、日常のルーチンに対するコントロールを失った老人ホーム入居者に見られる「学習性無力感」と一致する。SoEはこれを社会学的な「失うものは何もない(nothing to lose)」という

心理状態と結びつけ¹⁴、極度の無力化が、ヒュブリスが上から社会契約を腐食させるのと同様に、下から社会契約を腐食させることを示唆している。

1.3 歪曲のメカニズム：モラル・ライセンシングと有害な慈善

SoEの重要な構成要素は、福祉におけるヒュブリスが経済的ヒュブリスよりもさらにたちが悪い可能性があるという主張であり、その理由は**モラル・ライセンシング（道徳的許可）**にある。MoninとMiller（2001）らの研究は、個人が「道徳的証明（モラル・クレデンシャル）」（例：援助職を選ぶこと）を確立すると、自分の「善性」が貯金されていると感じ、逆説的にその後非倫理的に振る舞ったり偏見を示したりしやすくなることを確認している¹⁸。

ソーシャルワークにおいて、この現象は**トキシック・チャリティ（有害な慈善）**²⁰や「ヘルパーズ・ハイ（援助者の高揚感）」²²への批判と重なる。人助けに伴う陶醉感には中毒性があり、介護者が作り出している長期的な依存関係を見えなくさせる。これにより、専門家の「救済者」としての自己イメージが説明責任（アカウンタビリティ）から彼らを遮断し、「ヒュブリス症候群」が検知されないまま転移していくフィードバックループが形成される。これらの文献は、「善意」は権力乱用に対する安全装置ではなく、しばしばそのカモフラージュであるというSoEの主張を検証するものである。

1.4 技術的先例：憲法的AIとアルゴリズム的統治

SoEがリミタリアニズムの執行者として「憲法的AI」を使用するという提案は、AI安全性の分野にルーツを持つ。Anthropic社が開発した憲法的AIは、一連の高レベルの原則（憲法）を用いてモデルの出力を制約し、実質的にその振る舞いに「天井」を設けるものである²⁴。

これを政治哲学に結びつけるのは斬新な理論的飛躍である。しかし、福祉におけるアルゴリズムの使用は激しい論争の場である。ヴァージニア・ユーバンクスの『自動化される不平等（Automating Inequality）』は主要な対抗言説を提供しており、米国の自動意思決定システムがいかに貧困層をプロファイリングし、取り締まり、処罰するために使われてきたかを記録している²⁶。SoEはこのパラダイムを反転させようとしている。受益者を監視する「監視人道主義」²⁸ではなく、SoEは支援者を監視することを提案している。これは「アルゴリズム的説明責任」や「対抗監視（counter-surveillance）」の要求と一致するが、社会サービスにおける「技術解決主義（techno-solutionism）」の歴史を鑑みると、依然としてリスクの高い提案である²⁹。

1.5 ケアの会計：評価から監査へ

最後に、「福祉権力バランスシート（貸方/借方）」は、**フェミニスト経済学**のメタファーを利用している。ナンシー・フォルブレのような学者は、無償労働を国家統計において可視化するために「ケアの会計（accounting for care）」を長年主張してきた³⁰。しかし、フォルブレがケアの評価（Valuation）（生産的資産として扱う）に焦点を当てているのに対し、SoEは権力の監査（Auditing）（介入を自律性への負債や責任として扱う）に焦点を当てている。

この「ケアの評価」から「権力の監査」への移行は、行為の導き（conduct of conduct）が集計・管理されるフォーコーの**統治性（Governmentality）**概念と共鳴する³²。また、マイケ

ル・パワーによる「監査社会（Audit Society）」批判とも並行しており、そこではチェックボックスを埋める作業が実際の専門的判断に取って代わることが警告されている。

2. 論理的整合性分析：フレームワークのストレステスト

SoEの個々の構成要素は確立された文献に基づいているが、それらを統一理論へと統合するにはいくつかの論理的緊張が生じる。本セクションでは、内部矛盾を分析し、理論的解決策を提示する。

2.1 自律性のパラドックス

矛盾: SoEはサービス利用者の自律性を最大化することを目指す解放のプロジェクトであるが、それを達成するために、「権力監査」（憲法的AI、バランスシート）という厳格で監視的なシステムを提案しており、これは専門職である介護者の自律性を著しく制約する。自律性が普遍的な善であるならば、なぜ専門職の自律性の制限が正当化されるのか？ さらに、介護者と利用者の間にAIという「仲介者」を置くことは、新たな不透明なパターンリズムを導入することにならないか？

解決策: フレームワークは、干渉されない自由（*Liberty as Non-Interference*）（リバタリアンの見解）と、支配されない自由（*Liberty as Non-Domination*）（フィリップ・ペティットに関連するネオ・共和主義の見解）を区別しなければならない。SoEは暗黙のうちに後者を採用している。アノミー状態にあるサービス利用者は、ヒュブリス的な専門家による恣意的な干渉にさらされている。利用者の支配からの自由を確保するためには、専門家の恣意的な干渉能力を構造的に削減しなければならない。「天井」は専門家の自由の侵害ではなく、「構成的制約（constitutive constraint）」である。これは、信号機が安全な通行という「自由」を生み出すために無差別に運転する「自由」を制限するのと同様である。強者の制限は、弱者の自由の前提条件である。

2.2 指標還元主義の問題

矛盾: 命題2は、福祉権力を「代理決定数 × 不可逆性スコア」という式で定量化することを提案している。これは**指標への執着（Metric Fixation）**のリスクを生み出す³⁴。ジェリー・ミューラーが『測りすぎる世界（The Tyranny of Metrics）』で論じるように、「測定されるものは管理される」。もし介護者がこのスコアに基づいて監査されるならば、彼らはシステムを「ハック（gaming）」するかもしれない。例えば、「権力借方」を低く保つために、必要な（しかしスコアが高くなる）介入（例：精神病発症時の非自発的入院）を回避する可能性がある。この「リスク回避」はネグレクトにつながり、作為による害（ヒュブリス）を不作為による害（ネグレクト）に置き換えるだけになりかねない。

解決策: SoEは、「福祉権力スコア」があくまで**診断的ヒューリスティック**であり、**パフォーマンス目標**ではないことを明確にしなければならない。それは放射能測定器（ガイガーカウンター）のように機能すべきである。高い数値は不正行為を証明するものではなく、強化された精査と省察が必要な**高リスク環境**であることを示すものである。フレームワークは、スコアを

懲罰的措置（給与、昇進）から切り離し、代わりに**省察的实践（当事者研究）**と結びつける必要がある。スコアは「罰金」ではなく「対話」を誘発するものでなければならない。

2.3 普遍主義 vs 文脈主義

矛盾: 「双極性」モデルは、ヒュブリスとアノミーを説明するために普遍主義的な神経科学（ドーパミン系、接近/抑制）に依存している。しかし、「ケア」「自己」「自律」の概念は深く文化的である。多くのアジアの文脈（日本を含む）において、「甘え（依存）」は関係的な接着剤として価値があり、必ずしも病理ではない³⁵。ウブントゥ哲学では、人は他者を通して人となる³⁶。「依存」を「アノミー」として病理化するフレームワークは、精神的健康に関する西洋的・個人主義的な定義を集団主義的文化に押し付けるリスクがある。

解決策: SoEは「アノミー」の定義を洗練させる必要がある。病理は相互依存ではなく、強制されたあるいは絶望的な依存である。**当事者研究** (Self-directed study) がこの解決策を提供する。「健康」や「自律」の定義は、利用者自身のコミュニティによって生成される³⁷。もしコミュニティが相互依存的な意思決定を重視するなら、それは「同意なき代理決定」ではなく、「共有された意思決定 (shared decision-making)」である。「天井」は一方的な権力に適用されるものであり、共有された権力には適用されない。

2.4 「ミラーニューロン」の神経科学

矛盾: プロンプトでは理論の基礎として「ミラーニューロン」に言及している。ミラーニューロンに関する文献はしばしば誇張されており、相関関係に過ぎないものが多く、「ニューロ・ハイプ（神経科学的過大宣伝）」につながりやすい。論争のある神経科学に政治理論の基礎を置くことは、議論を弱める。

解決策: 神経科学は基礎としてではなく、**例証**として扱われるべきである。「双極性」モデルの強みは、その社会学のおよび心理学的な堅牢性（ケルトナー、オーウェン、デュルケム）にあり、これらは特定の神経メカニズムとは独立して成立する。レポートでは「ミラーニューロン」の主張を控えめにし、経験的により強力な「権力の心理学」¹²に焦点を当てることを推奨する。

3. 哲学的批判：伝統の衝突

SoEの堅牢性を検証するために、競合する哲学的伝統からの最も強力な反論を予期する必要がある。本セクションでは、リバタリアン、リベラル・エガリタリアン、コミュニタリアン、批判理論の観点からの厳格な査読シミュレーションを行う。

3.1 リバタリアンによる批判（ノージック / ハイエク）

視点: 個人の自由、自発的交換、国家干渉への懐疑。

反論: 「パターナリズムについてのパターナリズム」

リバタリアンは、ケア関係も他の関係と同様に自発的な契約によって統治されるべきだと主張する。クライアントが特定のケアホームやソーシャルワーカーを選ぶなら、彼らはその関係の条件に同意していることになる。専門家が行える決定に人為的な「天井」を設けることは、契約の自由の侵害である。クライアントが信頼できる専門家にすべての意思決定権限を自発的に委任できないと、誰が（あるいは国家/SoEが）言えるのか？さらに、「権力監査」の官僚機構を作ることは、介護者よりもさらに暴君的な「監視者」を生み出す可能性が高い。

SoEの防衛:

リバタリアンの防衛は崩れる。なぜなら「ケアの市場」は自由市場であることが稀だからである。サービス利用者はしばしば、極度の強制、認知障害、あるいは経済的必要性（アノミー）の下でシステムに入る。彼らには「失うものは何もない」14状態にあり、これは意味のある「離脱（Exit）」オプションを持たないことを意味する。離脱する力がない場合、その関係は契約ではなく独占である。独占はレントシーキング（この場合はエージェンシーのレントシーキング）を防ぐために規制を必要とする。「天井」は意志の独占に対する独占禁止法である。

3.2 リベラル・エガリタリアンによる批判（ロールズ/ドウォーキン）

視点: 公正としての正義、格差原理、機会均等。

反論: 「天井よりも床（最低保障）が重要である」

ロールズの正義は、最も恵まれない人々の地位を最大化すること（マキシミン戦略）に焦点を当てる。もし権力の集中（例：高度なスキルと権限を持つ外科医や、決断力のある児童保護官）が弱者にとってより良い結果をもたらすなら、その権力の不平等は格差原理によって正当化される。「天井」（権力の制限）に焦点を当てることは、弱者を助けようとする専門家自身の手足を縛り、意図せずして最も恵まれない人々に害を及ぼすかもしれない。それは結果（生存/ウェルビーイング）よりもプロセス（自律性）を優先している。

SoEの防衛:

SoEは、ヒュブリス要因のために、長期的には「格差原理」が機能しなくなると主張する。権力の集中は短期的には効率的かもしれないが、権力の心理学 13は、チェックされない権威が必然的に意思決定の質を低下させることを示している。ヒュブリス的なリーダーはフィードバックを聞かなくなり、リスクを無視し、最終的には「政策的惨事」を引き起こす9。したがって、「天井」は平等の理想だけでなく、**認識論的能力（epistemic competence）**の実用的な必要性によっても正当化される。謙虚さは効率性の制約条件なのである。

3.3 コミュニタリアンとケアの倫理による批判（トロント/ヘルド）

視点: 関係性、相互依存、「自律した個人」という神話の拒絶。

反論: 「愛の商品化」

ケア倫理学者は、ケアとは測定されるべき商品ではなく、特定の関係性に根ざした「実践」であると主張する。「バランスシート」38を通じて「福祉権力」を定量化しようとすることは、温かい関係性の絆に冷徹で取引的な論理を押し付けるものである。それは介護者に対し、相互作用を「借方」と「貸方」として見るよう強制し、ケアに関する「欠乏マインドセット」を助長する。この「会計論理」30は、真のケアに不可欠な信頼と流動性を浸食する。

SoEの防衛:

ケアは現代の福祉国家においてすでに商品化されている。専門家は時間の「単位」に対して報酬を得ており、機関は「成果」に基づいて資金提供を受けている。「愛」はしばしば構造的な

権力を隠すための上塗りに過ぎない³⁹。SoEは商品化を作り出すのではなく、ケアの言語の背後に隠されている権力力学を暴くのである。「権力の取引」を可視化することで、我々は「隠された支配」から「透明な説明責任」へと移行する。フォーコーが指摘するように、権力は至る所に存在する⁴⁰。それを測定することは、それを飼いならすための第一歩である。

4. ギャップ分析：SoEの新規性

本セクションでは、既存の文献には存在しない、SoEが世界の言説に対して行う独自の貢献を明確にする。

特徴	既存のフレームワーク	SoEのイノベーション
分配対象 (Distribuendum)	ロレインズ (リミタリアニズム): 所得、富、生態学的資源に焦点。	福祉権力: 制限されるべき希少資源として意思決定権限に焦点を移す。
心理モデル	オーウェン (ヒュブリス症候群): 政治指導者に焦点。 ケルトナー: 一般的な社会的権力に焦点。	双極性歪曲: 提供者のヒュブリスと受け手のアノミーを、福祉文脈における結合システムとして直接リンクさせる。
技術	ユーバンクス (自動化される不平等): 貧困層を取り締まるツールとしてのAIを批判。	反転された監視: 権力者 (専門家階級) を監査するツールとしてAIを提案。
指標	フォルブレ (ケアの会計): ケアの評価 (貸方/資産) に焦点。	権力監査: 介入のコスト化 (自律性への借方/負債) に焦点。
方法論	西洋的監査文化: 外的、懲罰的、トップダウン。	当事者研究: 内的、省察的、ボトムアップの「自己研究」を説明責任のメカニズムとする。

イノベーションとしての「日本的フレーバー」：
当事者研究 (Self-Study by the Affected) ³⁵の統合が決定的差別化要因である。西洋のフレームワークはしばしば「誰が監視人を監視するのか」という問題に苦闘する。SoEの答えは「当

事者（The Tojisha）」である。「権力監査」を利用者の生きた経験（Lived Experience）に基づかせることで、SoEはテクノクラートの管理主義の罟を回避する。AIの「憲法」は当事者によって書かれ、認識論的正義のツールとなる。

5. リスク評価：「指標の専横」

SoEフレームワークの最も重大な脆弱性は、定量化への依存である。ジェリー・ミューラの『測りすぎる世界（The Tyranny of Metrics）』における分析は、SoEを脱線させかねない「指標への執着」のいくつかの病理を特定している³⁴。

5.1 ゲーミングと「クリーミング」のリスク

もし「福祉権力」がスコアリングされ、ハイスコア（高介入）が監査を引き起こすなら、専門家は**ゲーミング（不正操作）**を行うかもしれない。彼らは一つの大きな不可逆的な決定（例：「施設入所」）を、一連の小さな可逆的な決定（例：「一時的配置」「2週間後の見直し」「延長」）に分割し、官僚的な回転（churn）を作り出して、「天井」に触れることなく利用者を疲弊させるかもしれない。あるいは、**クリーミング（いいとこ取り）**を行う可能性もある。平均スコアを低く保つために、介入をほとんど必要としない「扱いやすい」クライアントを選別し、高権力の介入（非自発的コミットメントなど）を真に必要とする「困難な」クライアントをネグレクトするかもしれない。

5.2 目標の置換（Goal Displacement）のリスク

ミューラは「測定されるものが、我々が本当に大切にしていることから努力を奪うかもしれない」と警告している⁴¹。もし「権力スコア」が質の主要な指標になれば、ケアの目標は「人間の開花（Flourishing）」から「スコアの最小化」へとシフトする。ソーシャルワーカーは、自分の「低い権力スコア」（自律性！）を誇らしげに示す一方で、そのクライアントは冷たいアパートでネグレクトにより死にかけているかもしれない。これは**自律性のパラドックス**である。**積極的自由**（ケイパビリティ）を犠牲にして、**消極的自由**（不干渉）を最大化してしまうのである。

5.3 監視人道主義のリスク

たとえAIが提供者を監視することを意図していたとしても、それは必然的に**利用者**に関する大量のデータの取り込みを必要とする⁴²。介入の「不可逆性スコア」を計算するために、AIは利用者の履歴、病状、選好を知る必要がある。この「ケアのデータ化」は、プライバシー侵害や機能の目的外利用（function creep）に対して脆弱な、利用者のデジタルツインを作成することになる。権力から利用者を守るために設計されたツールが、新たな脆弱性の源となる²⁸。

6. 専門家接触に向けた推奨改善案

イングリッド・ロレイNZや国際社会と成功裏に関与するために、山内裕治氏はこれらのリスクに対処し、『フェア・リミッツ・プロジェクト』の厳格さと整合するようにフレームワークを改善すべきである。

6.1 「通貨」の議論を洗練させる

推奨: 「代理決定」を唯一の通貨として提示しないこと。それを**「正義の指標の代理変数（proxy）」**として枠組み直す。ロレイNZ自身の言語を使用する。「自律性」が開花のために必要な資源であるならば⁷、「パターナリズム」はその資源の溜め込み（hoarding）である。SoEは、富がマクロ領域で政治的不平等を生み出すのと同様に、ミクロ領域（ケアホーム）で政治的不平等を生み出す「パターナリスティックな蓄積」を防ぐメカニズムである。

6.2 「指標への執着」に先手を打つ

推奨: ミュラーとユーバンクスを明示的に認めること。「憲法的AI」をロボット的な支配者としてではなく、「君主の鑑（Mirror for Princes）」として提案する。それは介護者に蓄積していく権力を映し出し、ヒュブリスへの生物学的衝動に対抗するための「抑制システム」（ケルトナー）を誘発するツールである。スコアは国家のための公的指標ではなく、専門家と当事者のための私的シグナルでなければならない。

6.3 「双極性」モデルを活用する

推奨: これは最も強力な理論的貢献である。ロレイNZは過剰な富が民主主義と環境に与える害に焦点を当てている。SoEは、過剰な福祉権力が保持者の心理（ヒュブリス）と受け手の社会学（アノミー）を害すると主張する。これはリミタリアニズムに対して心理学的/医学的な正当化を付加し、ロレイNZの政治的/道徳的正当化を補完するものである。

6.4 「当事者研究」を組み込む

推奨: 「権力監査」を当事者研究の一形態として位置づける。これにより、抽象的な理論が、「自己研究」と「コミュニティベースの回復」という実績ある日本の実践に基礎付けられる⁴³。SoEが単なる理論ではなく、既存の解放的实践の形式化された方法論であることを示す。「天井」は国家によってではなく、「当事者会」（サービス利用者の評議会）によって設定される。

6.5 「ヤマウチ・プロポジション」（エレベーターピッチ）

最終的な統合: 「ロレイNZ教授、リミタリアニズムは、誰も開花のために極端な富を必要としないことを成功裏に論じました。私は、誰もケアのために極端な『福祉権力』を必要としないことを提案します。リミタリアニズムの原則を意思決定権限という『通貨』に適用することで、最も脆弱な人々に体系的に『アノミー』を生み出す『福祉ヒュブリス』を診断し、予防することができます。私たちはこれを、日本の当事者研究の実践に基づく『権力バランスシート』を通じて運用可能にし、無力な人々を解放するために権力者を監査する『ケアのリミタリアニズム』を構築します。」

7. 経験的検証：理論からテストへ

SoEを哲学的命題から検証されたフレームワークへと移行させるために、以下の経験的ステップが推奨される。

7.1 「福祉権力指数（WPI）」の開発

関係性における権力の「密度」を測定する心理尺度を作成する。

- **項目:** 代理意思決定の頻度、介入の可逆性、情報の透明性、離脱の容易さ。
- **検証:** WPIスコアと、既存の「患者の自律性」や「QOL（WHOQOL）」尺度との相関を確認する⁴⁵。

7.2 ヒュブリス/アノミー相関のテスト

ソーシャルワーカーとクライアントの縦断的研究を実施する。

- **仮説:** ワーカーの高いWPIスコアは、「ヒュブリス症候群尺度」（オーウェン）の高スコアおよびクライアントの「学習性無力感」尺度の高スコアと相関する。
- **対照:** 「リミタリアンの」ケア設定（例：当事者研究グループ、オープンダイアログ）と、伝統的な階層的設定を比較する。

7.3 監査の監査

管理された環境で「権力バランスシート」をパイロット運用する。

- **リサーチクエスチョン:** バランスシートの導入は高権力介入の数を減らすか？ それとも「ゲーミング」や「クリーミング」につながるか？
- **方法:** ツールの導入前後における意思決定会議のエスノグラフィー観察。

結論

「Service of Empowerment」フレームワークは、リミタリアニズムの大胆かつ理論的に堅牢な拡張である。「意思決定権限」を、限界効用逓減と認知歪曲（ヒュブリス/アノミー）の対象となる「溜め込み可能な資源」として特定することで、SoEは政治哲学、社会心理学、ケア倫理の架け橋となることに成功している。

その中核的主張の妥当性は、ケルトナーの権力の神経科学からフーコーの生政治、ロレインズの分配的正義に至るまで、異なる文献の収束によって支持されている。しかし、「福祉権力簿記」や「憲法的AI」を通じたこの理論の運用は、「指標への執着」や「技術解決主義」の重大なリスクを伴う。

SoEが成功するためには、その指標を官僚的統制のツールとしてではなく、**認識論的正義**の手段として枠組み直す必要がある。それは、パターンリズムの目に見えない重みを可視化し、**当事者**（影響を受ける人々）が権力者に説明責任を負わせることを可能にする技術である。**当事**

者の視点に根ざした「ケアのリミタリアニズム」として位置づけられれば、それはフェア・リミッツ・プロジェクトに対する深遠な貢献となるだろう。

引用文献

1. Prof. Dr. Ingrid Robeyns | NWO, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.nwo.nl/en/prof-dr-ingrid-robeyns>
2. Vacancy: Postdoc in political philosophy/climate ethics (1.0 FTE), 1月 7, 2026にアクセス、
<https://fairlimits.nl/2019/03/07/vacancy-postdoc-in-political-philosophy-climate-ethics-1-0-fte/>
3. Rejecting Ingrid Robeyns' Defense of Limitarianism - University of Pennsylvania, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://repository.upenn.edu/bitstreams/eca15e08-81a3-42c8-a4f3-8a083fbda63f/download>
4. What, if Anything, is Wrong with Extreme Wealth? - Taylor & Francis Online, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/19452829.2019.1633734>
5. Limitarianism: An interview with Philosopher Ingrid Robeyns - YouTube, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.youtube.com/watch?v=sN3A08pbKK0>
6. Ecological limits: Science, justice, policy, and the good life - PMC, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC9285753/>
7. Having Too Much: Philosophical Essays on Limitarianism - Andrew M. Bailey, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://andrewmbailey.com/money/readings/robeyns.pdf>
8. The Origin of Failure: A Multidisciplinary Appraisal of the Hubris Hypothesis and Proposed Research Agenda | Academy of Management Perspectives, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://journals.aom.org/doi/10.5465/amp.2012.0177>
9. The Leadership Hubris Epidemic | springerprofessional.de, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.springerprofessional.de/en/the-leadership-hubris-epidemic/15101392>
10. THE LEADERSHIP HUBRIS EPIDEMIC - National Academic Digital Library of Ethiopia, 1月 7, 2026にアクセス、
<http://ndl.ethernet.edu.et/bitstream/123456789/67599/1/493%202018.pdf>
11. CC 2.2.indd - Crisis and Critique, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.crisiscritique.org/storage/app/media/2016-09-05/full-ed.pdf>
12. Shape-Trait Consistency: The Matching Effect of Consumer Power State and Shape Preference - PMC - NIH, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC8514985/>
13. Power and the Objectification of Social Targets - Ovid, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.ovid.com/journals/jpspy/pdf/10.1037/0022-3514.95.1.111~power-and-the-objectification-of-social-targets>
14. SOME PERSPECTIVES ON REVOLUTION - U.S. Naval War College Digital Commons, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://digital-commons.usnwc.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1782&context=ils>

15. ISTANBUL TECHNICAL UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL M.A. THESIS JULY 2023
HUBRIS: A CONCEPTUAL ANALYSIS AND ITS INFLUENCE ON INDI - polen.itu.edu.tr,
1月 7, 2026にアクセス、
<https://polen.itu.edu.tr/bitstreams/e06f0599-1d01-494a-99f1-c03079ff3382/download>
16. (PDF) Low Power Individuals in Social Power Research: A Quantitative Review,
Theoretical Framework, and Empirical Test - ResearchGate, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/327079779_Low_Power_Individuals_in_Social_Power_Research_A_Quantitative_Review_Theoretical_Framework_and_Empirical_Test
17. English - Economic and Social Council - the United Nations, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://docs.un.org/en/E/CN.4/Sub.2/1997/9>
18. Work–Family Backlash: The “Dark Side” of Work–Life Balance (WLB) Policies |
Request PDF, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/326283670_Work-Family_Backlash_The_Dark_Side_of_Work-Life_Balance_WLB_Policies
19. All in a Day's Work: Boundaries and Micro Role Transitions - Academy of
Management, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://journals.aom.org/doi/10.5465/amr.2000.3363315>
20. Understanding the Dynamics of the Individual Donor's Trust Damage in the
Philanthropic Sector | Request PDF - ResearchGate, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/291949643_Understanding_the_Dynamics_of_the_Individual_Donor's_Trust_Damage_in_the_Philanthropic_Sector
21. (PDF) Helping behaviors can negatively impact long-term well-being: How “skin in
the game” more effectively helps others - ResearchGate, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/321766826_Helping_behaviors_can_negatively_impact_long-term_well-being_How_skin_in_the_game_more_effectively_helps_others
22. It's Good to Be Good: Science Says It's So - Stony Brook University, 1月 7, 2026に
アクセス、
https://www.stonybrook.edu/commcms/bioethics/_pdf/goodtobegood.pdf
23. Empathy and Altruism: Are They Selfish? - Psychology Today, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.psychologytoday.com/us/blog/hide-and-seek/201410/empathy-and-altruism-are-they-selfish>
24. Moral disagreement and the limits of AI value alignment: a dual challenge of
epistemic justification and political legitimacy - PubMed Central, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC12628449/>
25. Can AI Empower the Rule of Law?, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://scholarship.law.unc.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1516&context=ncjolt>
26. Virginia Eubanks – Automating Inequality (2018) - SozTheo, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://soztheo.com/criminology/key-works-in-criminology/virginia-eubanks-automating-inequality-2018/>

27. Automating Inequality - Virginia Eubanks, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://virginia-eubanks.com/automating-inequality/>
28. QUANTIFYING VULNERABILITY: Humanitarian Datafication and the Neophilia of Integrated Power - Cultural Anthropology, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://journal.culanth.org/index.php/ca/article/view/4922/937>
29. Disability-based disparities under universal health coverage among chronically ill adults during the COVID-19 pandemic in Indonesia: an interrupted time series analysis | Request PDF - ResearchGate, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/397399589_Disability-based_disparities_under_universal_health_coverage_among_chronically_ill_adults_during_the_COVID-19_pandemic_in_Indonesia_an_interrupted_time_series_analysis
30. Supporting Workers by Accounting for Care - SciSpace, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://scispace.com/pdf/supporting-workers-by-accounting-for-care-19x5x579v4.pdf>
31. ENGAGING THE CARE ECONOMY IN THE GLOBAL SOUTH: DEBATES AND CONTESTATIONS - Institute For Economic Justice, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.iej.org.za/wp-content/uploads/2023/10/IEJ-CareEconomy1-Oct2023.pdf>
32. Governmentality in health care. In The Oxford Handbook of Healthcare Innovation - King's College London Research Portal, 1月 7, 2026にアクセス、
https://kclpure.kcl.ac.uk/portal/files/242833004/McGivern_2024_Governmentality_in_health_care_Ch_17_OUP_Handbook_on_Healthcare_Innovation_2Jan2024.pdf
33. Bringing Anglo-Governmentality into Public Management Scholarship: The Case of Evidence-based Medicine in UK Health Care - Oxford Academic, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://academic.oup.com/jpart/article/24/1/59/917971>
34. The Tyranny of Metrics Book Summary - Jerry Muller - Wise Words, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://wisewords.blog/book-summaries/tyranny-of-metrics-book-summary/>
35. Full article: Positioning and practical significance of 'encounter of tojisha-sei' in lifelong learning theories and research - Taylor & Francis Online, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/02601370.2025.2516778>
36. Autonomy, Suffering, and the Practice of Medicine: A Relational Approach - Digital Commons @ USF - University of South Florida, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://digitalcommons.usf.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=9274&context=etd>
37. Positioning and practical significance of 'encounter of tojisha-sei' in lifelong learning theories a - Kobe University, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/0100496570/0100496570.pdf>
38. Applied Ethics in a Digital World, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.asau.ru/files/pdf/3077041.pdf>
39. Care Workers in English Care Homes: Managing Commodification, Motivations, and Caring Ideals - Oxford Academic, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://academic.oup.com/sp/article/30/3/795/7186902>
40. 'We only got Coca-Cola': Disability and the paradox of (dis)empowerment in Southeast Nigeria - PubMed Central, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC6518960/>

41. The Tyranny of Metrics by Jerry Muller - Distilled for Educators - Socrates - Head of School, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.socratesheadofschool.com/books/tyrannyofmetrics>
42. Datafication of Care: Security and Privacy Issues with Health Technology for People with Diabetes - MDPI, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.mdpi.com/2075-4698/14/9/163>
43. Reliability and validity of the Japanese version of the INSPIRE measure of staff support for personal recovery in community mental health service users in Japan - ResearchGate, 1月 7, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/339092606_Reliability_and_validity_of_the_Japanese_version_of_the_INSPIRE_measure_of_staff_support_for_personal_recovery_in_community_mental_health_service_users_in_Japan
44. Reliability and validity of the Japanese version of the INSPIRE measure of staff support for personal recovery in community mental health service users in Japan - PubMed Central, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC7006071/>
45. The predictive values of a deliberative and a paternalistic attitude towards two situations of moral conflict: A study among Dutch nurse practitioners and physician assistants - PubMed Central, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC9545036/>
46. Full article: Welfare paternalism and objections from equality - Taylor & Francis Online, 1月 7, 2026にアクセス、
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/13698230.2024.2437340>